
藤尾慎一郎先生を送る

林 部 均

藤尾慎一郎先生は、1959年3月、福岡市の生まれである。1981年3月に広島大学文学部（考古学研究室）を卒業され、同年4月に九州大学大学院文学研究科修士課程入学、1983年4月より同大学大学院文学研究科博士後期課程に進学された。博士課程在学中、現在の研究の原点となる佐賀県宇木汲田貝塚の発掘調査に参加された。1986年3月に単位取得退学後、同年4月に九州大学文学部考古学研究室の助手に着任された。なお、博士号は、2002年の10月に、学部を卒業した広島大学文学部で「博士（文学）」を取得され、2003年10月に『弥生変革期の考古学』として同成社より刊行された。

国立歴史民俗博物館（以下、歴博）へは、1988年3月に考古研究部助手として着任され、36年間の長きにわたって在籍された。先生が在任中おこなった研究・業務は数多いが、とくに国際交流、自然科学との学際研究、大学院教育、総合展示第1展示室「先史・古代」のリニューアルをあげることができる。

国際交流では大韓民国との国際交流を軸に、弥生時代の社会がどのように成立していたかという問題を核にしながらか、そこに大きな影響を与えた朝鮮半島の無文土器時代を中心とするさまざまな考古資料を集成して理解するために、九大時代より親交のあった大韓民国の考古学者・安在皓氏らとともに歴博の国際交流の一環として共同して研究を実施して、現在の歴博の国際交流の基礎を築かれた。その過程で総研大に留学生を受け入れて指導教員となり、学位を取得させるなど若い研究者の育成にも尽力された。その時の学生である李昌熙氏は、現在も韓国の釜山大学校考古学科の副教授として活躍中である。

先生は歴博着任直後から鉄器や青銅器など金属器の冶金学的調査を情報資料研究部の齋藤努氏と共同で研究したことをきっかけに、坂本稔氏との炭素14年代、名古屋大学中塚武氏との酸素同位体比年輪年代、また国立科学博物館篠田謙一氏との古人骨DNA分析などさまざまな自然科学分野の研究者と共同研究をおこない、日本の水田稲作開始年代の見直し、古気候復元、渡来系弥生人の出自再考などの学際的研究を遂行された。その成果は、2014年に自らが展示代表者として開催した企画展「弥生ってなに?!」、2019年にリニューアルオープンした第1展示室「水田稲作のはじまり」のコーナーにいかんなく発揮されるなど、博物館型研究統合を实践された。とくに弥生長期編年とよばれるAMS-炭素14年代測定をもとに構築された新しい弥生時代の年代観は、まさに先生が学生時代から着目し検討を続けてきた九州北部における弥生時代のはじまりの土器編年観に基礎をおくものである。新年代観は、発表から20年を経た2023年4月に高校の教科書にも採用されることになった。

炭素14年代にもとづく新年代観は関連諸科学にも大きな影響を与えており、酸素同位体比年輪年

代をもとにした高精度の古気候復元や核ゲノム分析をもとにした弥生人の形成論が、先史考古学と共通の時間軸で議論する基盤を造ったことも先生の大きな業績といえる。

さらに弥生長期編年は従来の弥生時代観にも大きな影響を与えた。農業の開始と鉄器の使用開始が同時という、世界で唯一の先史文化であった弥生文化は、その前半期の600年もの間、石器だけが使われていたことがわかったため、鉄器が使われるようになる後半の600年とは別の時代として位置づける弥生時代の新しい時代区分論まで議論が発展することとなった。

さらに先生の提示された新年代観は、核ゲノム分析という最先端科学とのコラボを可能にした。分子人類学と協業することにより、核ゲノムが西日本の弥生前期にみられる遠賀川系土器が強い斉一性をみせる要因の一つを考える手がかりを示された。さらに1991年に埴原和郎が提唱し、多くの支持を得ていた二重構造モデルにも再考を迫るなど、今後の考古学と分子人類学のさらなる展開の可能性を示す礎を構築された。

1990年代に歴博の基幹研究であった佐原真元館長を研究代表とする「人類にとって戦いとは」プロジェクトにおいて、進行管理者として支えるだけでなく、日本における戦いのはじまりが集団間の争いを政治的に解決する手段として水田稲作とともに朝鮮半島から持ち込まれたことを契機とするという考えを示すなど、戦いのはじまりをシステム論の一環として捉えたことも業績の一つといえる。

これまで述べてきた「鉄」「環境」「戦い」「年代」「国際交流」というテーマの研究成果は、総合展示リニューアルにもいかに反映された。これまでの歴博展示の課題とされていた「国際交流」「環境」「列島の北と南」「移行期展示」も含めて実践することを第1室展示代表者として主導し、弥生時代にとどまることなく、第1室すべての大テーマの共通項目として位置づけられた。また、実務面でも強いリーダーシップを発揮し、2019年3月に無事にオープンへと導かれた。

またこうした先生の研究姿勢は、2006年から始まった同成社の『弥生時代の考古学』全9巻の刊行にあたって大きく貫かれ、先生を中心とした設楽博己氏、松木武彦氏という共同編集者とともに、昭和30年代生まれの研究者が新しい年代観で編集した初めての弥生時代の概説として学界でも注目され評価されることになった。

歴博の組織運営においては、2011年より研究推進センター長、副館長（館内担当）・研究総主幹として6年にわたって運営に参画され、法人化後に残されたさまざまな課題の整理と解決に貢献された。あと、私事で恐縮であるが、先生が副館長の時は、私が研究推進センター長、先生のあとの副館長・研究総主幹も引き継がせていただいた。歴博の運営にかかわるさまざまなご判断には、厳しさの中にもつ、やさしさを強く感じた。また、歴博というものをいかに制度的にも学問的にも強く、その存在を示そうとご尽力されたかは、同じ経験をしたものとして、その歴博への想いを強く感じる。

先生の学界、歴博でされた業績は、あまりにも多く、この一文では語りつくすことができない。先生が構築された、歴博の国際交流や環境史、高精度年代の研究は、歴博だけではなく、学界全体の次世代の研究者にも継承され、さらに発展することは間違いないであろう。このような先生の学恩に感謝しつつ、健康に留意され、さらなるご発展を祈念させていただくとともに、あとに続く私たちに引き続き、ご指導いただくことを願う。